

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K03116

研究課題名(和文) ベストプラクティス・アプローチに基づく心理教育プログラムの評価研究

研究課題名(英文) Use of best-practice approach in conducting and managing program evaluation

研究代表者

安田 節之 (Yasuda, Tomoyuki)

法政大学・キャリアデザイン学部・教授

研究者番号：00434340

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：エビデンスベースド・アプローチ(EBA)による評価研究が技術的・倫理的に困難であるプログラムに関する評価アプローチの検討を行うことが本研究の目的であった。そこでEBAを補完するベストプラクティス・アプローチ(BPA)の検討を行った。EBAで活用される実験・準実験デザインによる評価研究の方法論は発展し続けている一方で、それらの枠組みには依拠しない評価方法論の開発が急がれている。このようななか、優れた実践、即ちベストプラクティスの過程(プロセス)や効果を既存の方法論によって測定・評価し、それをベンチマーキングすることにより効果的・効率的なプログラムやサービスの質向上を行うBPAのあり方を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会科学はもとよりあらゆる領域においてエビデンスに基づく実践の重要性が指摘されている。これは社会サービスや教育プログラムをいわゆる経験や勘そして気合・気分・度胸(だけ)ではなく、エビデンス(データ)を活用して設計・運営・評価する流れと連動するものである。しかし評価対象の無作為抽出・配置といった技術面・倫理面における困難に代表されるように、科学的なエビデンスの収集・評価には様々なハードルが存在する。このようななか、対人・コミュニティ援助などにおいて優れた実践(ベストプラクティス)に焦点を当て、それを基準としたプログラムの評価研究および実践の質向上を行うことは、次善策としての価値・意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine a set of evaluation approaches where traditional evidence-based approaches (EBAs) were not applicable due mainly to the technical and ethical difficulties associating with EBAs. Accordingly, this study adopted best-practice approaches (BPAs) for the purpose of complementing and integrating issues/problems originating from EBA. Theories and methods of EBA, most notably those of experimental and quasi-experimental studies, were kept developing to improve the scientific quality of evaluation studies; yet, theoretical orientations and methodological issues relating to BPAs were to further develop so that the use of BPAs to program evaluation could have been justified. This study sought to develop methods to find a set of best-practice human service programs and monitor processes and outcomes of those programs via benchmarking procedures, which were then transformed into a series of targeted programs that were seeking to improve their effectiveness.

研究分野：社会科学

キーワード：プログラム評価 ベストプラクティス・アプローチ エビデンスベースド・アプローチ 対人・コミュニティ援助 プロセス評価 アウトカム評価 アカウンタビリティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

プログラム評価は、ヒューマンサービス領域で実施される心理教育・社会プログラムの効果を検証することを目的として、1970年代後半から米国を中心に発展を遂げており、日本ではコミュニティ心理学領域を含む様々な社会科学領域ほかにおいて継続的に研究が進められてきた。なかでも、個人や集団に対しての支援が真に有効・正当であるかを科学的根拠(エビデンス)や説明責任(アカウンタビリティ)をもって示す社会的要請の高まりとともに、広く普及してきた経緯がある。

本研究では、コミュニティ心理学領域におけるプログラム評価研究のなかでも特に発展が急がれるベストプラクティス・アプローチによる評価研究の方法を確立し、科学的なエビデンスの構築が難しいと考えられる対人・コミュニティ援助プログラムに対する評価方法論の検討を行う。

## 2. 研究の目的

本研究は、心理教育プログラムの「優れた実践」から抽出されるベストプラクティスを照合枠としたプログラム評価研究の方法を開発し、評価実践モデルを構築することを目的とする。近年、エビデンスベースド・アプローチへの注目が高まる一方で、実際にそれを教育機関・企業組織で行われる心理教育プログラムの評価に適用することは、技術・運営・倫理面から容易ではないケースが多い。このようななか各フィールドで多様な方法が模索されているが、効果的な評価アプローチについての報告は未だ数少ない。そこで本研究では、ベストプラクティス・アプローチの枠組みから介入の対象・内容・背景に即した評価方法を検討する。

本研究の課題(問い)は、エビデンスベースド・アプローチによる評価が困難である心理教育プログラムを、次善策として、どのようにベストプラクティス・アプローチによって効果的・効率的に評価するかである。その問いに対し、成功事例のベンチマーキングを行い、それを照合枠としたプログラム評価モデルを考案する。その上で、実験や効果測定が困難なプログラムの評価を実施し、実践の質向上の方策を検討する。これらを明らかにすることにより、様々な制約のあるプログラム(例:比較・統制群の設置やサンプル数の確保が望めない)の評価についての示唆を得ることが目的である。

## 3. 研究の方法

ベストプラクティス・アプローチ(BPA)の理論・方法論に関するレビューを実施し、自治体・企業組織において実施される個人・集団に対しての心理教育プログラム(例:キャリア支援・人材育成)の成功事例の検討を行う。またベンチマーク指標の作成(ベンチマーキング)の方法論を開発するため、プログラムの実施過程(プロセス)を可視化するツール作成に必要な手続きを確認する。BPAによるプログラム評価の検討を行うためには、いかに効果的にプログラム・プロセスの可視化を行うかが鍵となる。そこで、主にキャリア支援を想定したベンチマーキング(ベンチマーク指標の開発)についての研究を行い、どのような方法論が適しているかの考察を行い、アウトカム評価も含め総合的なプログラム評価モデルのレビューを行う。そして、BPAがこれまでのプログラム評価研究のどの枠組みに含まれるのか、あるいは新たな枠組みが必要なのかについての検討を行う。

## 4. 研究成果

2018年度は、対人・コミュニティ援助を目的として実施されるプログラムの成功事例の検討を開始したと同時に(例:自治体・企業におけるキャリア支援)、BPAの基礎となるベンチマーキングの方法論に関するレビューを行った。その結果、心理学諸領域の研究において活用されるEBAと本研究の対象であるBPAとは、理論(基礎)および方法論(応用)の多くの側面で異なるアプローチをとることが明らかになった。具体的には、EBAを活用したプログラム評価では因果関係の特定・査定に重点が置かれ、根拠となる結果を重視するなどアウトカム志向が強い。一方、BPAはむしろプログラムによる介入や実践活動の過程を明らかにする点などプロセス重視であることが確認された。プロセス重視の評価研究のあり方を模索するために、本年度は「優れた実践」を意味するベストプラクティスの実践過程(プログラム介入・サービス提供のプロセス)を

どのようにベンチマーキングによって可視化し、その後の評価モデルの開発につなげるかの検討を行った。

2019年度は、経営学領域で開発されたBPAやベンチマーキングに加え、主に経営工学領域において研究が進められているTotal Quality Management (TQM: 総合的品質管理)の考え方を参考に、プログラムの「プロセス」(介入の質)の評価、即ち、プロセス評価の方法論の検討を行った。アウトカム評価は、一般にアウトカム志向が強く、評価方法論が整備されているものの、前述した技術面等の問題により実施が困難であることから、それを技術的に補完するためのプロセス評価の方法論の検討である。

またフィールドにおけるBPAの現状を把握するために、研究協力者とともに、キャリア支援プログラム(例:高齢者のライフキャリア支援)におけるベストプラクティスのレビューを行った。その結果、多くのプログラムの実施過程および効果の検討には、いわゆる「評価に耐えうる」体系的な規準・基準(ベンチマーク)が導入されておらず、何をもって成功事例・優れた実践(BP)とするのか、どのように当該BPを他のプログラムに有意義に活用するか、という点を検討するためのプログラム・プロセスの可視化が体系的には行われていないことが確認された。

2020年度は、コロナ対応により研究課題の遂行なかでもベストプラクティス・アプローチに関する情報・データの収集が遅れたため、主に、アウトカム志向が強いEBAに基づく評価研究、即ち介入(原因)による成果(結果)という因果関係の規定が整っている対人・コミュニティ援助プログラムを対象とした評価研究の検証を行った。一般に、このようなプログラムは、エビデンス規準(evidence criteria)のレベルを下げつつ、関連データの収集および評価が行われることになる。他方、EBAにおける規準では評価可能性(evaluability)が決して高いとは言えないプログラムであっても、補完的に、介入の実施文脈に沿った質向上を目指すのがBPAによるプログラム評価であるため、いかにBPAはEBAを補完できるかという分析課題に基づく各方法論の整合性の検証を行った。

2021年度は、コロナ対応により研究課題の遂行に遅れが生じたものの、EBAを補完する役割が期待できるベストプラクティス・アプローチ(BPA)に基づくプログラム評価研究のあり方について継続的に研究を行った。プログラム評価の理論と方法論はEBAで活用される実験・準実験デザインによる評価研究を中心に発展し続けている。一方、それらの枠組みには必ずしも依拠しない多様なデータ(量的・質的データ)およびその分析に基づく評価方法論の開発が急がれている。なかでもベストプラクティスの効果の把握(cf. 検証・測定)は、例えば、サクセスケース・メソッド(SCM: Success Case Method)といった既存の評価方法論を活用することにより、効率的に行うことが可能となることが確認された。

2022年度(最終年度)では、BPAを展開するにあたって既存のプログラム評価の理論・方法論をどのように活用できるかを継続して模索した。昨年度のSCMに続き、今年度は評価研究の専門的知見・判断を評価基準としたデルファイ・メソッド(DM: Delphi method)の応用可能性を検討した。従来のプログラム評価では、介入の過程と効果・成果がそれぞれプロセス評価とアウトカム評価という枠組みで評価されるが、本研究課題でこれまで検討してきた通り、EBAでは技術的・倫理的に困難なケースにはこのような従来の評価形式が適用できないことも多かった。そこで専門的知見の収斂を目的としたDMを基盤とした評価実践の可能性が示された。なかでも専門的知見のなかには有機的に包含される規準・基準に基づき複数名・複数回の反復(iteration)型データ収集を行うDMは、価値判断・価値づけの方法が重視される評価方法論に適している。DMにおける具体的なプログラム分析として、本研究課題の研究協力者と共に、就職氷河期世代支援プログラムの一環として設置された就職氷河期支援窓口への応用を評価可能性アセスメントの方法論の枠組みのなかで検証し、データ収集や評価結果の活用(use)のあり方を検討した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 安田節之・梅崎修・椋田亜砂美・三好真人	4. 巻 18
2. 論文標題 チームワーク形成を目的としたPBL型教育の効果測定：研修評価アプローチによる検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生涯学習とキャリアデザイン	6. 最初と最後の頁 11-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki Yasuda	4. 巻 18
2. 論文標題 Validity Inquiry Through Cronbach ' s Lens	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Lifelong Learning and Career Studies (生涯学習とキャリアデザイン)	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安田節之	4. 巻 45
2. 論文標題 研修効果測定とサクセスケース・メソッドによる体系的な研修評価アプローチの検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 試験と研修	6. 最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安田節之	4. 巻 16
2. 論文標題 ベストプラクティス・アプローチに基づく評価研究（1）：エビデンスに基づく実践との比較から考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生涯学習とキャリアデザイン	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋美保・石津和子・森田慎一郎・石橋太加志・安田節之	4. 巻 58
2. 論文標題 高校生に対するライフキャリア教育のプログラム開発とその効果評価：ライフキャリア・レジリエンスを高めるために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 598-604
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 地方と都市のコミュニティを考える (指定討論)
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会第22回大会 大会企画シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 ソーシャルワーカーによる退院支援実践の自己評価とプログラム評価 (担当：プログラム評価)
3. 学会等名 日本医療社会福祉協会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 産学連携・PBL型教育プログラムの評価研究：チームエンパワメントの効果検証に向けて
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会 (於：仙台国際センター)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuda, T., Umezaki, O., Mukuta, A., & Miyoshi, M.
2. 発表標題 Evaluating Teamwork in Japanese High School Students: A measurement tool to assess team empowerment.
3. 学会等名 126th Annual Convention of American Psychological Association (San Francisco, CA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuda, T., & Saito, Y.
2. 発表標題 Psychological Empowerment, Sense of Community, and Meaning in Life among Japanese College Students.
3. 学会等名 126th Annual Convention of American Psychological Association (San Francisco, CA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三好真人・安田節之・梅崎修・棕田亜砂美
2. 発表標題 高校生を対象としたProblem Based Learning型プログラムの体験分析：習熟度別サンプリングによる体験の特徴
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会第21回大会（於：大妻女子大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 多職種連携の中で心理職には何が求められるのか：コミュニティ心理学的視点から、10年後を模索する
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会第21回大会 企画シンポジウム（於：大妻女子大学）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 ソーシャルワーカーによる退院支援実践の自己評価とプログラム評価
3. 学会等名 日本医療社会福祉協会 2018年度ソーシャルワーク スキルアップ研修（於：KFC Rooms）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 カリキュラムの評価とマネジメントをめぐる : 効果検証を中心に
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第29回大会 課題研究 （於：北海道教育大学旭川校）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安田節之
2. 発表標題 学生相談活動のためのプログラム評価入門
3. 学会等名 日本学生相談学会第36回大会ワークショップ 講演（於：関東学院大学）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuda, T.
2. 発表標題 Examining the cross-lagged relationship between psychological empowerment and subjective well-being.
3. 学会等名 128th Annual Convention of American Psychological Association (Washington, DC) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本コミュニティ心理学会研究委員会（分担執筆：安田節之）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 336
3. 書名 コミュニティ心理学（「コミュニティ心理学研究のあり方（pp.14-23）」「プログラムを評価するとは（pp.286-296）」「量的研究からのアプローチ（pp.305-314）」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

プログラム評価ラボ <a href="http://programevaluationlab.jp/">http://programevaluationlab.jp/</a>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------